

# 子どもの社会性の発達と学校外教育： サッカーへの取り組みに関わる子どもの気質と家庭要因

梅 崎 高 行・酒 井 厚\*

## Development of Children's Sociality and Out-of-school Education: Temperament of Children Practicing Soccer and Their Family Environment

UMEZAKI Takayuki and SAKAI Atsushi

**Abstract:** Factors supporting out-of-school education were examined with children practicing soccer (N = 195), based on the framework for Physical Activity-based Positive Youth Development Program (PA-PYD). Correlations between soccer competence and performance, and explanatory variables, such as children's soccer experience, their temperament, as well as parents' child-rearing attitudes among others, were examined by multiple regression analysis. The multiple coefficient of determination for soccer competence was .12, which was significant at the 5% level. Among the independent variables, standardized partial regression coefficients of sex and warmth and were significant, whereas there were no correlations with the cause or the time of starting soccer. Multiple coefficient of determination for performance was .24, which was significant at the 1% level. Four variables indicated positive correlations and three variables indicated negative correlations with performance, and strict child-rearing attitudes and children's behavioral trait of being cautious predicted low performance in group sports. The above results suggest that soccer competence might be correlated with parents' warm child-rearing attitudes, and performance might be correlated with practice, effort and patience specialized for soccer. On the other hand, strict child-rearing attitudes and the cautious temperament in children could lower performance.

**Key Words:** development of sociality, out-of-school education, soccer, PA-PYD

**要旨：**身体活動をベースとした青少年教育（PA-PYD）の枠組みに基づき、サッカーに取り組む子ども 195 名を対象として、学校外教育を支える要因について検討した。サッカーのコンピテンスならびにパフォーマンスを説明する変数として子どものサッカー経験、気質、親の養育態度などとの関連を重回帰分析によって検討した。この結果、コンピテンスにおいて重決定係数は .12 であり、5% 水準で有意な値であった。独立変数の標準偏回帰係数のうち有意であったものはなく、性別と養育の温かさにのみ有意傾向が認められた。一方、パフォーマンスにおいて重決定係数は .24 であり、1% 水準で有意であった。独立変数のうち正の関連が 4 変数に、負の関連が 3 変数に見られ、養育の厳しさや子どもの行動特徴の慎重さなどが集団スポーツにおけるパフォーマンスの低さを、一方で粘り強さがパフォーマンスの高さを予測した。以上の結果から、サッカーのコンピテンスには親による温かい養育が、またパフォーマンスにはサッカーに特化した取り組みや努力、忍耐強さが関係し、養育の厳しさや気質としての慎重さはパフォーマンスを低めることが示唆された。

**キーワード：**社会性の発達、学校外教育、サッカー、PA-PYD

---

\*首都大学東京准教授

## 問 題 と 目 的

AI の進化に伴い、今ある職業は 10 年後に、約半数が不要になると言われる (Frey & Osborne, 2013)。こうした社会の到来に備え、求められる資質は何かが議論されてきた。この結果「認知的スキル」と「社会情動的スキル」が導かれている。とりわけ「自己を統制しながら他者と関わり、目標を成し遂げる」社会情動的スキルは、これから生きる子どもに必要な資質と考えられる (Hirsh-Pesek & Golinkoff, 2016)。園を含む学校は、認知的スキル (知識や情報の獲得・操作) に偏ってきた教育を脱し、「主体的・対話的で深い学び」へ移行しつつある (文部科学省, 2015)。また就学前期は、社会情動的スキルを育む最適期であることから (Heckman & Masterov, 2007)、保幼少の連携も強化されている。こうした動向はアセスメントを用いて評価され、その間にも変わる社会との適合を図りながら微修正される (鈴木, 2014)。教育の無償化といった制度設計も、これらエビデンスが基礎である。ただし、教育の担い手は学校だけではない。学校教育が得意なことと、学校外教育が得意なこととがある。

たとえば Larson, Hansen, & Moneta (2006) は、学校教育との対照に、スポーツや芸術など 6 つの学校外教育を選出している。その上で、ポジティブな経験 (自己の確立や社会資源への接触など) とネガティブな経験 (プレッシャーや大人の不適切な関わりなど) は、両教育間でどちらが多く与えられるか比較した。すると、学校教育よりも学校外教育の方が、社会情動的スキルの発達に関わるポジティブな経験が多くもたらされていた。中でもスポーツは、進取の精神、感情の制御、チームワークやソーシャルスキルを学ぶポジティブな経験が、他の学校外教育に比べても有意に多かった。

それでは、学校外教育の方が子どもの発達に有効かと言えば、そう簡単には結論できない。Larson, Hansen, & Moneta (2006) によればスポーツでは、ストレスや孤独感・劣等感といったネガティブな経験も多く、また学校教育の、学業達成 (認知的スキルの獲得) に対する貢献度の高さも確認され、多様な選択肢こそ重要との見解にとどまっている。公教育が広く行き渡ったことによって、子どもの将来を決めるのは学校外教育だとする保護者の意識も見られるが (文部科学省, 2008)、現状では、子どもの発達におけるスポーツや芸術活動の影響は特定が難しいと言える。

ところで学校外教育は「子どもが学校の授業以外で定期的に経験する選択的な学習活動」と定義される (片岡, 2009)。含まれるのは、家庭学習 (通信教育)、塾・教室、スポーツ活動、芸術活動である。この定義に従って実施された調査では、小学校高学年の 9 割が何らかの学校外教育に参加しており、うち 8 割はスポーツを中心に、塾・教室と家庭学習を組み合わせるパターンを示した (ベネッセ教育総合研究所, 2013)。ところがこのような状況は、進級に連れて一変する。高校進学を機にスポーツ参加率は 5 割を切り、代わってそれまで見られなかった「何もしない子ども」が出現し始める。あれほどいた活動人口はなぜ減少してしまうのか。理由として、以下の (ア)~(ウ) が挙げられる。

(ア) 勉強を理由とするやめについては、身体活動と認知機能に関する知見の不行届きも一因と言える。運動を支える認知能力の活性化は、認知的スキルを向上させることが実証されており (紙上・Hillman, 2012)、スポーツは勉強に資すると考えられる。筆者らも身体活動の豊富さ (種類および頻度の高さ) が、性別・月齢や家庭の年収を考慮しても、子どもの認知・言語能力の高さを予測することを明らかにしている (酒井・眞榮城・梅崎・前川, 2017)。したがって問題は、スポーツと勉強の時間配分であり、子どもが自らの生活を設計していけるような教育と、実際に両立可能な環境が求められていると言える。

(イ) 心的な消耗によるやめは、勝利至上や体罰 (文部科学省, 2013) など、青少年教育 (Positive Youth Development; PYD) に反するスポーツ環境が引き起こす問題である。精神病理的な状態へ至らずとも、「指導のバイアス (集団への働きかけの偏り)」が、子どもをスポーツから遠ざける実態も報告されている (梅崎, 2010)。本来子どもには、確一的ではない多様なロールモデルが提供されるべきだろう。こうしたモデルは PYD を目指したスポーツ環境でこそ得られるのであり、収集に向けて PYD を具現化する環境とは何か、アセスメントも必要だろう。なお、PYD においてスポーツのやめは、一律にネガティブな経験とはならない。引退して指導者を目指すなど、個人にとって転機となるやめもある (梅崎, 2004)。このように個人にとって事象の意味は、活動をプロセスで捉える縦断調査でなければ解釈できない。軌跡を追うことで、たとえばきっかけは他律でも、それを自律に変えるようなスポーツ環境についてエビデンスも得られよう。

(ウ) 経済的な理由によるやめは、子どもの貧困が問題となるわが国にとって喫緊の課題である。2013年度の学力テストでは、児童・生徒約4万人を対象とした調査から、成績の悪さと家庭の収入の低さとの相関が示された(文部科学省, 2014)。問題は、経済的理由のために「学校外教育を利用できない」家庭が見られることである。この様子はスポーツでも見られ、先行調査においても、サッカーをする子どもの家庭は一般の平均収入を上回った(梅崎・酒井, 2017)。塾・教室は友だちづくりに(Posner & Vandell, 1999)、スポーツは認知能力の向上に(紙上・Hillman, 2012)、それぞれ資するといった知見も見られる。このように学校外教育には、直接的な内容を越え、間接的にも子どもに恩恵をもたらす可能性がある。アセスメントによってPYDに資する学校外教育を認定し、質保障された活動に参加できるバウチャーを発行するなど、経済的不利に対する制度設計が求められよう。

もとより適度なスポーツは、人の生を健やかに育む上で欠かすことができない。したがって、子どもの生活からスポーツが消えていくこのような状況に、やむなしと目をつむることはできない。先ごろ改訂された新学習指導要領においても、健康な心と体は子どもの育ちの基礎と位置づけられる。ところが子どものスポーツは年齢とともに尻すぼみとなり、他方、全国体力・運動能力調査(文部科学省, 2017)においては、子どもの身体活動の2極化—スポーツをする子どもは過剰なまでに行い、しない子どもはまったくしない状況—が指摘される。これらの状況を念頭に本研究では、スポーツ(physical Activity; PA)を通してPYDを目指す、スポーツ環境の構築を検討する。

もっとも、社会適応に対するスポーツの貢献は、100年にも及ぶ議論がある。しかしその研究は定性・回想・横断的(Fraser-Thomas & Cote, 2009; Gould, Collins, Lauer, & Chung, 2007; 梅崎, 2017)で、知見の一般化に至らなかった(Weiss, Kipp, & Bolter, 2012)。たとえば以下のようなエピソードも、親や指導者を省みさせる内容である。こうしたエピソードがもつ示唆を、実証的な研究によって一般化していくことが求められる。

サッカー日本代表の昌子源選手(鹿島アントラーズ)は、今もゲームが終わると電話をかけて来て、父親である力氏(兵庫県サッカー協会技術委員長)の意見を求めるという。源選手はサッカーを始めてから現在まで、とりわけその幼少期に、多忙な父親からサッ

カーの手ほどきを受けられたわけでは必ずしもなかった。父親もまたサッカーの仕事で忙しかったためである。ではなぜ息子さんは日本代表になれたのですか。周囲からそのような質問が増えるに連れ、今なお協会の一員としてサッカーに携わる力氏はその説明を考えるようになった。なぜなのか。こうして思い返されたのが「息子の話を聞くことではなかったか」であった。力氏は次のように話す。「源のプレーを見て、あれこれ言ったことがない。代わりに、帰ってきた源に今日はどうだったかとよく聞いた。ここで私のしたことはただ一つ、それで?と合の手を入れることだった。すると源も、帰ったらお父さんに話したいと思ったからではないか。説明できるよう次第にプレーを記憶してくるようになった。つまり、彼なりに自覚的にプレーするようになった。それが彼の成長の要因ではないかと」。

(2017年8月11日、国体近畿ブロックスタッフミーティングにおける昌子力氏の談話。第一著者による聞き取り)

こうした示唆を一般化する手法として、近年、スポーツを通して青少年教育を目指すPA-PYDの動向が見られる。発達に対するスポーツの恩恵を、心理・教育学的視点から包括的に理解しようとするフレームであり(Petitpas, Cornelius, Van Raalte, & Jones, 2005; Weiss, Kipp, & Bolter, 2012)、文脈(心理的に安寧な環境における内発的に動機づけられた活動であるかどうか)、外的な所産(思いやりがあり配慮に富んだ大人や仲間や地域での活動かどうか)、内的な所産(多様な状況に対処する心性を学ぶことのできる活動かどうか)を構成要素にもつ。その上で対象を、競技スポーツやトップアスリートに限定せず、広く子どもの身体活動と位置づけて、運動遊びを含む幼児期の遊びから、青年期の専門的スポーツまでをも見通す。統制群を設けた縦断的手法を中心とし、上記したような示唆に富む質的データも併用する。このPA-PYDフレームを援用し、本稿では、縦断研究として着手された調査の第一波データについて報告する。スポーツは、選択される学校外教育の1位であり、中でもサッカーは、選択される集団スポーツの1位である(ベネッセ教育総合研究所, 2013)。このサッカーを対象とした縦断研究では、転機としてのやめを含む多様な経路が得られるものと予想され、PYDの検討材料として妥当だろう。そのようにして昌子氏とは異なる父親が、源選手とは異なる子どもに対峙する際の、養育上の示

唆を検討していく。

## 方 法

### 対象者と手続き

2016 年 11 月から 12 月にかけて、X サッカー協会が行う 2016 年度キッズエリートプログラムに参加する小学 1 年生から 4 年生の全選手の保護者を対象に調査を実施した。キッズエリートプログラムとは、(公財) 日本サッカー協会 (以下、JFA) が推進する事業であり、持てる能力の向上を目指し、希望するキッズ年代 (10 歳以下) の子どもたちに、JFA 公認コーチが、発育発達を考慮した適切なトレーニング機会を提供する趣旨で行われる ((財団法人) 日本サッカー協会, 2009)。X サッカー協会は上位組織である JFA の認可を受け、2007 年度よりこのプログラムを展開している。2016 年度の参加選手は全 10 クラス、計 289 (男児 226, 女児 63) 名であった。調査は、X サッカー協会キッズエリートプログラム担当組織である Y 委員会を通じて依頼し、2016 年 10 月に開催された委員会で調査の承認を得たのち、各クラスの担当指導者を通じて参加選手に調査票が配布された。調査に際しては、同封された説明文によって守秘義務について説明し、調査への参加は任意であることを伝えた。回答は対象選手の養育を中心的に担う養育者に依頼し、両親がいる場合には、母親が回答するよう依頼した。同意して回答した調査票は、個々人が返信用封筒に厳封し、郵送によって回収された。依頼された 289 名のうち、回答したのは 195 (母親 185, 父親 10) 名であった (回収率は 67.5%)。本研究では、この 195 名のデータをもとに解析を行った。

### 調査内容

2010 年より、著者らが進める別の縦断研究「子どもの社会性の発達研究プロジェクト (Project of Environmental Effects on Relationships and Self; PEERS)」との対照も企図して、社会情動的スキルの発達に関わる個人特性、家庭 (親やきょうだい)、仲間、園・学校、地域に関わる変数を選択した。併せて Coatsworth & Conroy (2009) より、子どもの自律性と社会性を育むスポーツ環境、なかでも指導者の指導に着目して、関わる項目を選択した。Coatsworth & Conroy (2009) では、グローバル・コンピテンス (社会生活全般に渡って効用をもつコンピテンス) に至る、スポーツを通して育まれるコンピテンス (以下、スポーツ

コンピテンス) を鍵概念として想定する。この上で、スポーツコンピテンスに関わる個人特性、なかでも自律性と、子どもの自律性を支援する指導者のコーチング行動との関連について、介入を用いた短期縦断デザインによって実証している。その結果、自律性支援の高さがスポーツコンピテンスを高め、主体的な目標設定や自己省察といった社会情動的スキルを高めるプロセスについて明らかにした。一方、家庭の関わりなど他の変数について、より長期の縦断研究におけるメカニズム解明を課題としている。本研究でも Coatsworth & Conroy (2009) を参考に、サッカーを通した子どもの発達に関わる変数間の関連を検討する。

**対象者の属性** 性別と年齢、サッカー開始年齢、サッカーを始めたきっかけ、サッカーの練習頻度、サッカー以外の習いごとについて尋ねた。このうちきっかけについては、4 つの選択肢 (1: ○○ちゃんがやりたいと言いつけた、2: 親 (あなたか配偶者) が薦めて始めた、3: きょうだいの影響、4: その他) から回答してもらった。サッカー練習頻度については、キッズエリートプログラムの練習日を除き、所属チームと、所属チーム以外のクラブやスクールの、1 週間における練習日の合計をたずねた。隔週で練習が行われる場合など、小数点が用いられた回答 (たとえば 4.5 回/週など) については、小数点以下を切り捨ててカウントし、この場合は 4 回と数えた。サッカー以外の習いごとについては、PEERS を参考にしてリストアップされた 14 項目から選択を依頼した。このとき、3 つ以上の習い事をしている場合は、習っている期間が長い順に 2 つ選ぶよう依頼した。選択された 14 項目をスポーツ系 (スイミング、野球、剣道・柔道・空手、バレー・体操、ゴルフ) と非スポーツ系 (文化系: 楽器、囲碁・将棋、勉強系: 書道、そろばん、英会話、くもん、学習塾) にカテゴライズし、スポーツ系を 1、非スポーツ系を 0 とコード化した。「その他」や「していない」の回答は、非スポーツ系に含められた。

**養育態度の温かさ** 母親による普段の養育態度の質を表す指標として、PBI (Parenting Bonding Instrument; Parker, Tupling, & Brown, 1979) を基に作成された親評定版 (菅原・酒井・眞榮城・小泉, 2000) を使用した。PBI は、養育態度を温かさ (care) と過干渉 (over-protection) の 2 次元から捉える尺度であるが、本研究では温かさに注目し、「○○ちゃんに温かくやさしい声で話しかけている」、「○○ちゃんに対して冷たい」(逆転項目)、「○○ちゃんといろいろなことを

話すのを喜んでいる」, 「よく〇〇ちゃんにはほえみかけている」, 「〇〇ちゃんにやさしい」の5項目を、あてはまる(5)からあてはまらない(1)の5件法で母親に回答を求めた。全項目の内的整合性を示す $\alpha$ 係数は.81であり、5項目の合算を養育態度の温かさ得点とした。

**養育態度の厳しさ** やはり母親による普段の養育態度の質を表す指標として、Shumow, Vandell, & Posner (1998)のRAISING CHILDREN CHECKLISTを基に作成された親評定版10項目(菊池・松本・酒井・菅原, 2015)を使用した。この尺度は、養育態度を厳しさ(Harsh: 質問例「不当だと思った決まりごと(ルール)について、〇〇ちゃんに疑問を投げかけて欲しいと思いますか(逆転項目)」), 権威主義(Firm-Responsive: 質問例「あなたが決めた決まりごと(ルール)について、なぜそのようにしなければならないかという理由を〇〇ちゃんに説明しますか」), 許容(Permissive: 質問例「自分のその日一日の予定を、〇〇ちゃん自身に決めさせていますか」)の3次元から捉える尺度であり、一貫した統制方略を用いて子どもの成長を促すとともに、その際に使用する言葉の頻度について尋ねている。本研究では、養育態度を多角的に捉えるため、養育の温かさ(菅原ら, 2000)と負の関係にあると考えられたHarshに着目した。「以下の質問は、あなたが〇〇ちゃんにふだんどのように接しているかについてお伺いするものです。それぞれの質問について、最もあてはまると思う番号に○をつけてください」と教示し、全くそのとおりだ(4)からまったく違う(1)の4件法で母親に回答を求めた。内的整合性を示す $\alpha$ 係数は.60であり、3項目の合算を養育態度の厳しさ得点とした。

**Temperament and Character Inventory; TCI temperament** (神経伝達物質に由来し、遺伝の影響が大きい気質)と**character** (自己洞察に由来し、後天的な経験や環境の影響が大きい性格)から**personality** (人格)を捉えようとする尺度であり、Cloningerらによって開発された(Cloninger, Svrakic, & Przybeck, 1993)。TCIでは、**temperament**の下位尺度として、(1)衝動的・無秩序な気質を捉える新規性追求(*novelty seeking*; NS。質問例: 他の子供達よりも、たやすくかんしゃくをおこしてしまう), (2)不安・悲観・慎重深さを捉える損害回避(*harm avoidance*; HA。質問例: はかの子よりも元気がなく疲れやすい), (3)愛着・信頼・温情を捉える報酬依存(*reward dependence*; RD。質問例: あまり自分の気持ちを他人と分かち合わない

(逆転項目)), (4)努力・こだわり・持続性を捉える固執(*persistence*; P。質問例: 学校でほかの子よりもがんばる(家でたくさん勉強する, スポーツの練習, 楽器の練習など))が想定されている。また**character**の下位尺度として、(1)責任感・臨機応変性を捉える自己志向(*self-directedness*; SD。質問例: 自分で目標を決めることの利点を理解していない(逆転項目)), (2)共感・優しさを捉える協調(*co-operativeness*; C。質問例: 自分とは全然違う子たちのことも受け入れられる), (3)想像力の豊かさ・観念主義を捉える自己超越(*self-transcendence*; ST。質問例: 奇跡は起こると信じている)が想定されている。本研究では、菅原・田中・酒井・眞榮城・齊藤(2014)によって開発された就学期児・親回答版75項目を用いて、あてはまる(4)からあてはまらない(1)の4件法で母親に回答を求めた。得られた回答のうち本研究では、サッカーの取り組みに関係すると考えられた損害回避(HA)と固執(P)に注目した。内的整合性を示す $\alpha$ 係数の値は、損害回避(HA).84, 固執(P).71であり、項目の合算をそれぞれ、損害回避(HA)得点(22項目), 固執(P)得点(7項目)とした。

**サッカーに対するコンピテンス** サッカーに対する子どものコンピテンスを捉えるため、**self-perception** 児童期版の運動能力評価項目(眞榮城・菅原・酒井・菅原, 2007)を、許可を得てサッカーに合うよう文言を変えた上で使用した。眞榮城ら(2007)は、Harter(1985, 1988)の自己知覚尺度を簡易利用する目的で開発されたWichstrom(1995)の日本語版に当たる。眞榮城ら(2007)は、「ゲームやスポーツはするより見ているほうだ」を含む6項目の構成であったが、本研究はすでにサッカーに取り組む子どもを対象にした調査であったため、この項目を除外して5項目の構成とした。すなわち「同じ学年の友だちよりもサッカーがよくできると思う」、「サッカーならどんなプレーやポジションでもよくできると思う」、「したことのないプレーやポジションでもうまくできると思う」、「初めてするプレーやポジションはうまくできないと思う」(逆転項目), 「サッカーがもっとよくできたらいいのにと思う」(逆転項目)の5項目であった。回答者である養育者には、「〇〇ちゃんはサッカーをどのように考えていると思いますか。あなたが普段の〇〇ちゃんの様子を見て、お感じになる気持ちに最もあてはまる番号1つに○をつけてください」と教示した。

**サッカーのパフォーマンス** サッカー選手としてのパフォーマンスを、キッズエリートプログラム各クラ

ス 2 名の担当コーチの合意により、5 段階 (5: 当確, 4: ほぼ当確, 3: ボーダー, 2: ほぼ落選, 1: 落選) で評定してもらった。評定は、実際にキッズエリートプログラムで用いられている基準を借用した。この評定は、通常年度末に実施され、次年度の選手選考に活用されている。本調査に合わせ、通常より 4 ヶ月ほど早いタイミングの依頼となり、「まだ十分に見ることができていない」などのケースも見られた。その場合は判断を保留してもらい、調査時点で明確に判断できた 140 ケースを解析に用いた

## 結 果

**サッカーに対するコンピテンス尺度の因子分析** 眞榮城ら (2007) から 1 項目を除いた 5 項目を用いて、因子分析 (最尤法・Promax 回転) を実施した。その結果、負荷量がどの因子にも .40 に満たない項目 (「サッカーがもっとよくできたらいいのと思う」) が 1 つ存在した。これは、眞榮城ら (2007) の日本語版が児童自ら回答する形式であったのに対し、本調査では母親に回答を依頼したことが影響した可能性が考えられる。そこでこの項目を除外して同様の因子分析を行った結果、第 1 主成分の寄与率が 59% であり、1 次元構造が認められた。この因子を構成する 4 項目の内的整合性を示す  $\alpha$  係数は .76 であった。本研究では、4 項目の合算を子どものサッカーに対するコンピテンス得点とした。

**基礎統計量** 各変数の基礎統計量は Table 1 に示した通りであった。ここでは 1% 水準で有意な関連を示したものをみていく。まず属性についての変数間で

は、子どもの性別とサッカー開始年齢に正の相関が ( $r = .36, p < .01$ )、子どもの性別とサッカーの練習頻度との間に負の相関 ( $r = -.28, p < .01$ ) がそれぞれ見られた。また練習頻度は、子どもの月齢とも有意に関連した ( $r = .21, p < .01$ )。次いで説明変数間では、養育の温かさと養育の厳しさとの間に負の相関が見られた ( $r = -.41, p < .01$ )。さらに養育の温かさは、固執気質との間に正の相関を示し ( $r = .22, p < .01$ )、一方で固執気質は、養育の厳しさとの間に負の相関を示した ( $r = -.20, p < .01$ )。最後に、結果変数にかかる関連として、コンピテンスにかかる 1% 水準での関連は見られなかった。5% 水準で養育の温かさ ( $r = .16, p < .05$ ) と固執気質 ( $r = .15, p < .05$ ) が正の、損害回避気質 ( $r = -.15, p < .05$ ) が負の関連を示した。一方パフォーマンスについては、サッカーの練習頻度が 1% 水準で有意な正の関連を示した ( $r = .25, p < .01$ )。5% 水準では、固執気質 ( $r = .21, p < .05$ ) が正の、養育の厳しさ ( $r = -.17, p < .05$ ) と損害回避気質 ( $r = -.19, p < .05$ ) が負の関連を示した。

**性差** これら各変数の得点を子どもの性別によって比較し、有意な差が見られるか検討した。Table 2 に示した通り、サッカー開始年齢 ( $t(192) = -5.33, p < .001$ )、サッカーの練習頻度 ( $t(54.1) = 3.68, p < .01$ )、養育態度の厳しさ ( $t(192) = 2.29, p < .05$ ) のそれぞれに有意な差が見られた。

**重回帰分析** これらの変数を投入して重回帰分析を実施した (Table 3)。その結果、コンピテンスにおいて重決定係数は .12 であり、5% 水準で有意な値であった。独立変数の標準偏回帰係数のうち有意であったものはなく、子どもの性別 ( $\beta = -.14, p < .10$ ) と養育

Table 1 基礎統計量と相関係数

	平均値	SD	レンジ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
a: 子どもの性別 (1: 男児, 2: 女児)	1.21	0.41	1-2		.05	.36**	.00	-.28**	.09	.02	-.16*	.01	-.01	-.11	.01
b: 子どもの年齢 (月齢)	119.47	14.41	86-144			.15*	-.20**	.21**	-.13+	-.04	-.06	-.06	.07	.10	.31
c: サッカー開始年齢 (月齢)	61.58	13.42	29-102				-.17*	-.22**	-.04	-.03	.03	.13+	-.11	-.12	-.00
d: サッカーを始めたきっかけ (1: 自分, 2: 親, 3: きょうだい, 4: 他)	2.10	0.99	1-4					-.09	-.07	-.02	-.08	.19*	-.09	-.04	-.01
e: サッカーの練習頻度/1 週間	3.89	1.88	0-7						-.07	.09	.08	-.20**	.18*	.13+	.25**
f: サッカー以外の習いごと (1: スポーツ系, 2: 非スポーツ系)	0.34	0.48	0-1							.11	-.07	-.19*	.02	-.08	-.11
g: 養育態度の温かさ	20.43	3.18	12-25									-.41**	-.17*	.22**	.16*
h: 養育態度の厳しさ	7.21	1.92	2-11										-.07	-.20**	-.00
i: 損害回避 (HA) 気質	45.93	8.51	26-69											-.17*	-.15*
j: 固執 (P) 気質	17.80	2.93	11-24												.15*
k: サッカーのコンピテンス	13.94	2.02	9-20												.20*
l: サッカーのパフォーマンス	3.39	1.00	1-5												

+ $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$

Table 2 各変数の平均値の性差

	性別	N	平均値	SD	t 値
サッカー開始年齢（月齢）	男	155	59.17	12.33	-5.33***
	女	39	71.15	13.40	
サッカーを始めたきっかけ （1：自分，2：親，3：きょうだい，4：他）	男	154	2.10	0.99	0.02
	女	40	2.10	0.98	
サッカーの練習頻度／1 週間	男	155	4.16	1.74	3.68**
	女	40	2.85	2.01	
サッカー以外の習いごと （1：スポーツ系，2：非スポーツ系）	男	155	0.32	0.47	-1.21
	女	40	0.43	0.50	
養育態度の温かさ	男	155	20.39	3.12	-0.33
	女	40	20.58	3.46	
養育態度の厳しさ	男	154	7.37	1.88	2.29*
	女	40	6.60	1.99	
損害回避（HA）気質	男	144	45.54	8.14	-1.25
	女	35	47.54	9.86	
固執（P）気質	男	150	17.88	2.86	0.70
	女	39	17.51	3.19	
サッカーのコンピテンス	男	155	14.05	1.97	1.55
	女	40	13.50	2.18	
サッカーのパフォーマンス	男	112	3.36	0.99	-0.84
	女	28	3.54	1.07	

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

Table 3 サッカーのコンピテンスとパフォーマンスの重回帰分析

説明変数	サッカーのコンピテンス		サッカーのパフォーマンス	
	$\beta$	SE	$\beta$	SE
子どもの性別（1：男児，2：女児）	-.14 <sup>+</sup>	.39	.15 <sup>+</sup>	.22
子どもの年齢（月齢）	.09	.01	.21*	.01
サッカー開始年齢（月齢）	-.09	.01	-.02	.01
サッカーを始めたきっかけ （1：自分，2：親，3：きょうだい，4：他）	-.01	.15	.06	.09
サッカーの練習頻度／1 週間	.59	.08	.16 <sup>+</sup>	.05
サッカー以外の習いごと （1：スポーツ系，2：非スポーツ系）	-.09	.31	-.15 <sup>+</sup>	.18
養育態度の温かさ	.14 <sup>+</sup>	.05	-.14	.03
養育態度の厳しさ	.05	.08	-.20*	.05
損害回避（HA）気質	-.12	.02	-.18 <sup>+</sup>	.01
固執（P）気質	.08	.05	.15 <sup>+</sup>	.03
調整済み $R^2$	.07*		.17**	
N	175		127	

<sup>+</sup> $p < .10$  \* $p < .05$  \*\* $p < .01$ 

態度の温かさ（ $\beta = .14$ ,  $p < .10$ ）に有意傾向が見られた。関連があると予想されたサッカーの開始年齢やサッカーを始めたきっかけは関連が見られなかった。一方、パフォーマンスにおいて重決定係数は .24 であり、1% 水準で有意であった。独立変数のうち有意で

あったものは、子どもの年齢（ $\beta = .21$ ,  $p < .05$ ）と養育態度の厳しさ（ $\beta = -.20$ ,  $p < .05$ ）であった。この他、サッカーの練習頻度（ $\beta = .16$ ,  $p < .10$ ）やスポーツ系の習い事（ $\beta = -.15$ ,  $p < .10$ ）、また慎重さ（ $\beta = -.18$ ,  $p < .10$ ）や粘り強さ（ $\beta = .15$ ,  $p < .10$ ）など、全

5 変数に有意傾向が見られた。

## 考 察

本研究では、社会情動的スキルに関わる個人内外の要因を、PEERS ならびに Coatsworth & Conroy (2009) より選択・投入して、PA-PYD フレームに基づく今後の縦断研究に向けた探索的な検討を行った。なかでもグローバル・コンピテンスへの転用が想定され、自律性の鍵と考えられるスポーツコンピテンス(本研究ではサッカーのコンピテンス)を従属変数として、これを説明する要因を探った。比較の対象として、サッカーのパフォーマンスを従属変数に設定して、スポーツ経験の成果と考えられるコンピテンスに関わる要因との異同を見た。

調査対象者の属性に関する分析から、女兒に比べて男児において、早期かつ頻度高くサッカーに取り組む様子がうかがわれた。また養育態度の厳しさについても、親が男児に対して女兒より首尾一貫した態度で接している様子がうかがわれた。このような家庭の養育におけるジェンダー意識が、競技にも影響している可能性が考えられた。また練習頻度については、学年が上がるに連れて増す傾向が見られ、発育発達に伴いサッカーへの取り組みが本格化していく様子がうかがわれた。

説明変数のうち、養育の温かさと養育の厳しさは負の関連を示し、2つの養育態度は質的に異なる養育観に基づくことが示唆された。本研究ではこれら養育態度と、子どもの努力や粘り強さといった気質との関連までは分析されなかったが、今後の縦断研究では、親子の相互作用を含めた検討を行う必要がある。

これらの変数を投入した重回帰分析の結果から、従属変数であるコンピテンスとパフォーマンスの双方に共通して関わっている変数はほぼ見られなかった。まずコンピテンスに影響するのは、親が温かい養育をしていることであった。家庭の温かさが、児童期初期の子どものサッカーに対する自信を育み、後押しすることが示された。一方、コンピテンスに関係があると思われた、サッカーを始めたきっかけや開始時期、また他のスポーツをしているかどうかについては関係が見られなかった。

次にパフォーマンスに関して、子ども自身もつ気質としての粘り強さは、そうでない子どもに比べて指導者から高く評価されていた。さらに、サッカーに特化して取り組んでおり、サッカー以外の他のスポーツ

をしていない子どもの方が、この時点においての評価が高かった。幼少期のスポーツについては、早期専門化(early specialization)と早期多様化(early diversification)に関する議論がある(酒井, 2016)。幼いころから一つの種目に特化して取り組む専門化と、様々な種目を並行して行う多様化のどちらが、競技力の向上や発育発達にとって望ましいのか。今後の調査から明らかにされる必要があるだろう。加えてパフォーマンスについては、養育の厳しさや慎重な行動的特徴が、集団スポーツのパフォーマンスを低めることが示唆された。これら個人内外の要因は、プレーを慎重なものとし、現時点での将来性の低さとして指導者の目に映るのかもしれない。ただし、家庭における言葉を介したやりとりや、注意深く判断するようなプレースタイルは、サッカーはもとより今後の人生で開花していく可能性も考えられる。指導者は長期的な視野に立ち、本人の気質とともに家庭の養育態度も考慮した上で、子ども一人ひとりを見ていく必要があるだろう。

なお本研究の課題として、2点を挙げる。1点目は性差の扱いについてである。いくつかの変数には性差による有意な得点差が見られたため、その後の分析も性別ごとに実施すべきであったかもしれない。男児と女兒の協力人数のアンバランスさから、本研究では性差を込みにした分析を行ったが、今後は性別ごとの分析にも耐えるリクルートが求められる。2点目は、本研究で鍵概念としたスポーツコンピテンスの調査方法である。小学1~4年生を対象にした本調査では、母親に、子どもの気持ちを想像して回答してもらうよう教示した。しかし本研究では、眞榮城ら(2007)で見られた構造が再現されなかったことから、わが子の立場に立った回答が困難であった可能性がある。回答を容易にする、より適切な項目や方法の用意を今後の検討課題としたい。

以上、本研究では、PA-PYD フレームに基づく縦断調査の第1波データについて報告した。先行調査から今後のサッカーや社会情動的スキルの発達に関わると予想された変数を選択・投入して、一時点における因果関係を検討した。その結果、養育の温かさがコンピテンスを促進し、養育の厳しさがパフォーマンスを阻害するといった関連が見られた。本研究で得られたこれら要因間の関係を踏まえ、今後は縦断研究の中で、取り組みの促進・阻害に関わるプロセスについて検討していく必要がある。



## 文 献

- ベネッセ教育総合研究所 (2013). 学校外教育活動に関する調査 2013 データブック.
- Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., Przybeck, T. R. (1993). A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **50**, 975-990.
- Coatsworth, J. D., Conroy, D. E. (2009). The effects of autonomy-supportive coaching, need satisfaction and self-perception on initiative and identity in youth swimmers. *Developmental psychology*, **45**, 320-328.
- Fraser-Thomas, J. & Cote, J. (2009). Understanding adolescents' positive and negative developmental experiences in sports. *The sport psychologist*, **23**, 3-23.
- Frey, C. B. & Osborne, M. A. (2013). The future of employment: how susceptible are jobs to computerisation. Oxford martin programme on techology and employment.
- Gould, D., Collins, K., Lauer, L., & Chung. (2007). Coaching life skills through football: A study of award winning high school coaches. *Journal of applied sport psychology*, **19**, 16-37.
- Harter, S. (1985). Self-perception profile for children. University of Denver.
- Harter, S. (1988). Self-perception profile for adolescents. Denver: University of Denver.
- Heckman, J. J. & Masterov, D. V. (2007). The productivity argument for investing in young children. NBER working paper No.13016.
- Hirsh-Pesek, K. & Golinkoff, R. M. (2016). Becoming brilliant: what science tells us about raising successful children. American psychological association.
- 紙上敬太・Hillman, C. H. (2012). 習慣的運動が子どもの認知機能に与える影響－健康脳の育て方－, 第27回健康医科学研究所性論文集 平成22年度, 1-10.
- 片岡栄美 (2009). 解説・提言1 子どものスポーツ・芸術活動の規定要因－親から子供への分化の相続と社会化格差－ ベネッセ教育総合研究所 第1回学校外教育活動に関する調査 2009 データブック.
- 菊池知美・松本聡子・酒井厚・菅原ますみ (2015). 母親に抱える保育施設との相談：就学後の子どもの問題行動との関連プロセス チャイルド・サイエンス, **11**, 66-70.
- Larson, R. W., Hansen, D. M., & Moneta, G. (2006). Differing profiles of developmental experiences across types of organized youth activities. *Developmental psychology*, **42**, 849-863.
- 眞榮城和美・菅原ますみ・酒井厚・菅原健介 (2007). 改訂・自己知覚尺度日本語版の作成：児童版・青年版・大学生版を対象として *心理学研究*, **78**, 182-188.
- 文部科学省 (2008). 子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告 (http://www.mext.go.jp/b\_menu/houdou/20/08/\_icsFiles/afidfile/2009/03/23/1196664.pdf) (2017年10月22日)
- 文部科学省 (2013). 体罰の禁止及び児童生徒理解に基づく指導の徹底について (通知) (http://www.mext.go.jp/a\_menu/shotou/seitoshidou/1331907.htm) (2017年10月22日)
- 文部科学省 (2014). 全国学力・学習状況調査 (きめ細かい調査) の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究 平成25年度「学寮調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」国立大学法人お茶の水女子大学 (http://www.nier.go.jp/13chousakekkahoukoku/kannren\_chousa/pdf/hogosha\_factorial\_experiment.pdf) (2017年10月22日)
- 文部科学省 (2015). 教育課程企画特別部会における論点整理について (報告). (http://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm) (2017年10月22日)
- 文部科学省 (2017). 平成27年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査 集計結果. (http://www.mext.go.jp/a\_menu/sports/kodomo/zencyo/1364874.htm) (2017年10月22日)
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British journal of medical psychology*, **52**, 1-10.
- Petitpas, A. J., Cornelius, A. E., Van Raalte, J. L., & Jones, T. (2005). A framework for planning youth sport programs that foster psychosocial development. *The sport psychologist*, **19**, 63-80.
- Posner, J. K. & Vandell, D. L. (1999). After-school activities and the development of low income urban children: A longitudinal study. *Developmental Psychology*, **35**, 868-879.
- 酒井厚 (2016). 子どもから学ぶ：発達心理学への招待 第1回 運動と心の発達 (http://www.blog.crn.or.jp/report/02/223.html) (2017年10月23日)
- 酒井厚・眞榮城和美・梅崎高行・前川浩子 (2017). 子ども期の社会性の発達に関する縦断研究プロジェクト (16)－幼児期の身体運動と認知・言語能力評価との関連－ 第14回子ども学会議プログラム・抄録集, 62.
- Shumow, L., Vandell, D. L., & Posner, J. K. (1998). Harsh, firm, and permissive parenting in low-income families: relations to children's academic achievement and behavioral adjustment. *Journal of family issues*, **19**, 483-507.
- 菅原ますみ・酒井厚・眞榮城和美・小泉智恵 (2000). 青年前期における不適応行動の出現と家族ダイナミクスとの関連 安田生命社会事業団研究助成論文集, **36**, 96-102.
- 菅原ますみ・田中麻未・酒井厚・眞榮城和美・齊藤彩 (2014). 生涯発達におけるクオリティ・オブ・ライフと精神的健康 (4)－就学前期におけるパーソナリティの加齢変化：遺伝と環境の影響性の検討－ 日本パーソナリティ心理学会
- 鈴木正敏 (2014). 幼児教育・保育をめぐる国際的動向－OECDの視点から見た質の向上と保育政策－ *教育学研究*, **81**, 78-90.
- 梅崎高行 (2004). サッカーをやめた高校生の事例 「やめる」動機づけ 動機づけ理論はいかにしてネガティブな現象を説明できるか? 日本発達心理学会第15回発表御論文集, S 67.

- 梅崎高行 (2010). サッカー指導における相互的なバイアス構成の検討 *教育心理学研究*, **58**, 298-312.
- 梅崎高行 (2017). 青年期の有能感と自己決定感に及ぼす子ども期の習い事経験-家族のサポートによる調整効果- *人間科学研究 (甲南女子大学)*, **53**, 37-46.
- 梅崎高行・酒井厚 (2017). 子どもの社会心理的な発達と身体活動 (1): サッカーへの取組に関わる気質と家族要因第 14 回子ども学会議プログラム・抄録集, 61.
- Weiss, M. R., Kipp, L. E., & Bolter, N. D. (2012). Training for life: Optimizing positive youth development through sport and physical activity. In Murphy, S. M. (Ed.), *The oxford handbook of sport and performance psychology*. New

York: Oxford University Press, pp.448-475.

- Wichstrom, L. (1995). Harter's self-perception profile for adolescents: Reliability, validity, and evaluation of the question format. *Journal of personality assessment*, **65**, 100-116.

財団法人日本サッカー協会 (2009). We start kids' elite programme (キッズ年代エリートプログラム).

#### 謝辞

調査にご協力いただいた保護者の皆様, X サッカー協会 Y 委員会の皆様, 貴重なエピソードをお聞かせくださった昌子力さんに深く感謝申し上げます。